学園遍歴（承前）

渡辺美知夫

学園遍歴（承前）

渡辺美知夫

霞浦突端の東京医科歯科大学予科に私が出講したのは、終戦直後のことで、当時は戦中の軍国主義の反動で共産主義が幅を利かせ、つい昨日まで白旗振りにうつつを抜かしていた人が、手の裏をかえすように今日は赤旗を振りまわす世の中になっていた。予科のスタッフの中にも、若くて威勢のよい共産党員が一人いて、中年初老の教授たちまでがその若者の鼻息をうかがう言動をするのが、私には気に入らなかった。これは世相に振り廻されているだけのことで、問題の本質はそっちのけだと私には思われた。そこへ多賀工専の英語科主任で英文学の大先輩でもあるHさんから「手伝ってくれ」という誘いが来た。そちらへ移れば新築中の官舎に入れるという「ニンジン」まで付いていた。私は当時引揚げ早々で、妻の実家の居候だったので、この人参の魅力は強烈であった。私は早々に霞浦に別れを告げることにして、多賀工専の新年度のための準備を手伝い始めた。ところがある日工専の庶務主任がH教授のところに来て言うには、「渡辺さんの任期は四月からなので、それより前に仕事をされては困る」とのことである。Hさんも私も「ああそう」と申し入れの趣旨は了解した上で、実際の仕事は元の如し、ということにした。これは後に東京に出てからこれとは逆のケースに出遭うことになるので、好対照として鮮烈に記憶している。

新築の官舎は太平洋を見晴るがす崖の上の松林の北側に、四軒正方形に並んで建っていた。家そのものは仮小舎のような、お粗末な代物であったが、私には環境がすっかり気に入った。私は日夜松林をくぐり抜けて崖っぷちに佇ち、打寄せる磯波の白や、水平線の青を飽かず眺めた。初めの年には松林の中に山百合の花が一面に咲いていたが、翌くる年にはそれが一本残らず姿を消してしまった。ショッキングな経験であった。

海沿いの平地は一面の野菜畑で、その処々に点々と農家がある。農夫、農婦は一人残らずその日の糧を得るために、早朝から日の暮れるまで重労働である。やがて気付いたのは子供たちが構いつけられず、所在なげな様子であった。親たちには彼等を顧みているいとまがないらしい。そこで私は新築の「官舎」の座敷を開放して、日曜学校のようなものを始めてみた。驚いたことに官舎は忽ち満員になった。私はいささか戸惑いながらも、日曜礼拝のようなことを始めることになった。讃美歌を歌い、神さまに感謝を捧げ、願いごとをして、その日心に留まったことを短かく話した。そんな形がしばらく続いているうちに、打明けた話話題が種切れになっても来たし、そろそろ型にはまりかけた成り行きに変化を与えて見たくなった。そこである日グリム童話の一つを択んで話してみた。ところが話が終った途端、十一、二才の女の子がスックと起ち上って、

「わたしたちは此処へ神様の話を聞きに来てるんです。お伽噺の会に来てるのではありません」と決然と言い放った。私は正に吐胸をつかれた。感動した。私はそれ以後ほんものの礼拝のつもりで諸事を執り行なった。子供達も素直に私について来てくれた。お互いの生活に張りが出、まとまりを見せた。

そこへ振って湧いたのが山梨からの便りである。昭和十六年夏以来終戦まで旅順工大の学長であったAさんから、是非山梨大学に来てほしいとのことである。敗戦後の教育理念の混乱の中で、山梨大学の戦後経営を委託されたものらしい。私はすでに旅順工大で、Aさんの許で、五年ほど学生主事の体験があるにはあったが、それはAさんとの人生論議の結果、意気に感じてという結果ではなくて、少なくとも私の側からは全く事務的な動機によるものであった。今迄にも幾度か触れたと思うが、私が英語教師の席を空けて、学生主事の職に就く決心をしたのは、私の数年先輩で仙人のような人柄の石井三郎さん一家に迷惑がかかるのを、何としても避けたかったからで、終戦真近の当時としては、それ以外に方法が見付からなかったのである。従って終戦後の今となっては、Aさんに義理を感じる理由は私にはもはや何も無かった。そこで私は端的にAさんからの申越しを断わった。

丁度その頃多賀工専は茨城大学工学部となり、私の所属も茨城大学文理学部ということになっていたので、

今迄になんの係わりも繋がりもない山梨に、今更移らねばならぬ必然性がまるで感じられなかった。従って山梨側から折返し再度の要請があっても私の心は動かなかった。すると今度は山梨大の事務局長が学長の「親書」を携えてやって来た。それでも私には一体山梨大学が私に何をさせたいのかが判らないので意志のひるがえしようがなかった。すると今度は「学生部長にするから来てほしい」と言って来た。これは私という人間をなびかせる方法のうち、最もまづい手である。私という人間は、何とか課長とか、何とか部長とかいう肩書がつくと、途端にその肩書に対して過度の責任を感じてしまって、精神が自由に羽ばたかなくなってしまう性分なのだ。そこで私はこれを最後のつもりで、

「そんなものにするなら尚のこと行く気はない」と返答した。すると折返し

「そんなら何にもしないから来てほしい」ということである。

むかし中国に「三顧の礼」ということがあったと聞いているが、自分の場合すでに三顧は過ぎている。それでも相手が諦めてくれぬとなると、中国の故事の上を行くことにになると、流石の私も些か弱気になった。これが運の尽きで結局私は山梨大に転任することに決まってしまった。ところが今度は足許から否やが出た。茨城の文理学部長の、独文学のSさんが私を呼んで曰く

「どうして君は山梨へ行く気になんかなったんだ。こちらでは今後のことも考えて、君の身分のことも既に考えているのに――思い直すわけには行かぬのか」ということであった。

「山梨の方に既に承引の旨を伝えていますので」というわけで、私は「四顧の礼」にこだわることになった。

愛着断ちがたい松林を去る日が来た。官舎のすぐ近くを確か鮎川電鉄とか云った可愛い電車が走っていて、私共一家は先づその停留所に向った。すると既にそこには私の家に集まって来ていた子供達と、その親達が群れていた。私共を見送りに来てくれたのである。

かみともにいまして
ゆく道をまもり
あめの御糧もて
ちからをあたえませ

また会う日まで
また会う日まで
かみのまもり
汝が身を離れざれ

（讃美歌四〇五番）

みんなが声を合わせて送ってくれた。その歌声に涙を催しながら私共は甲府に向った。思いがけぬ別れの情景であった。

引越しは大変だった。まだ幼い子供達を三人連れている上に、運送屋が「割れるといけないから」と積み残して行った家内の姿見を、私が背負わねばならぬ羽目になっていたのだ。今ならひどく人目を惹いたであろうが、当時は戦後の混乱がまだ濃く尾を引いている頃だったから、それほどでもなかったと自分では思っている。兎に角私共一家は「国鉄」を乗り継いで中央線にたどり着き、ほぼ満員の客車に乗りこむことができてホッとした。当時は汽車旅行も容易ではなかったのだ。

そのうちに汽車が動き出すと、まづ隣の人が私の背中の姿見を網棚にしっかりとのっけてくれ、まわりの人達からは口々に「どこまで行くのか」とか「何しに行くのか」とか口々に「訊問」が始まった。山梨大学に赴任するのだと仄めかすと、そこからは私への忠告、教育が続くことになった。客車のあちこちから声があがる。すべて男の声であった。

汽車に乗ってこういう目に遭ったのは、この時が初めてで、そして最後だったから、話の條々を今以て次々に思い出すことができる。

「山梨は冬は北海道並み、夏は台湾並みだから、子供達のからだに気を付けるように」

「ぶどうが名物なので判るように、山梨は日当りがいいんだ」

日当りが良いとぶどうがどうしてよく出来るのか、その理屈は私には今もってよくは判らない。

「山梨で米が獲れるのは甲府近辺だけだ」

これについては、これも忘れられない体験がある。着任後しばらくして、初めて東京に出ての帰途、たまたま駅前から一緒に歩き出した主婦らしい中年の女性に

「甲府はお米がまづいですね」と言い掛けた途端、その女性がキッとなって私をたしなめた。

「山梨の人間がみんなでお米の御飯がたべられるよ

うになったのは、実は戦時中の「配給」のお蔭なんですよ。むかしは白い御飯なんて滅多にたべられはしなかったんです。今わの際の病人に、竹筒に少しばかり入れたお米の音を聞かせることもあったもんだなどという話さえ聞いています」私があとにして来た茨城県は名立たる米産県であった。私この時のショックを裏付けるべく、その年の秋富士山麓の、たしか鳴沢とか云った村の様子を見に出掛けてみた。立ち並ぶ家々の軒に玉蜀黍を吊した縄がビッシリ並んでいた。日射しを避ける簾のように見えた。

「米のとれない処の人間はコスッカライから、用心が肝要」

そういえばこれも着任早々、子供たちのためにピンポンのできる台をしつらえてやったところ、ピンポン玉が幾つも要るとあって、駅前の運動具店に買いに出掛けた。店番をしていたのは相当なお齢のおばあさんであった。

「ピンポン玉を下さい」

「何個かね」

「さあ、一個いくらなんですか」

私はおばあさんの言う値段を聞いて

「それじゃあ一函下さい」と言って半ダース入った箱を受け取ったが、おばあさんの請求した値段は一個六倍より大きな数字であった。これは此処では買物をするとき、必ず値切ることが必要なんだなと、私は直感させられた。私はそういう掛け引きが大の苦手だし、時間の浪費だと思っているので、遂にその店ではピンポン玉を手に入れそこなった。（これはひょっとするとおばあさんの単純な計算ちがいだったかもしれない。）

「山梨では有能な人間はどん〳〵京浜地方へ出て行ってしまう」

「そこで成功した連中に、地元に残った人間が何彼につけてタカりに行くのさ」

私はいささかやり切れなくなって来た。

「わしが国さということがありますが、それは自分の故里を褒めたり自慢したりすることじゃないんですか。今迄のお話はみんなその反対に、くさす話ばかりですね」私は言わざるを得ない気分になっていた。それでもみんなは黙ってしまわなかった。

「あんたは大学の先生らしいが、山梨の人間は忘恩の徒だから覚悟をきめておくことだ。あとでガッカリ

しないようにね」

「忘恩の徒はなにも山梨にかぎったことではないでしょう」と私。

「甲州は貧しいんで外国に興味を持つ者は多いね。移住した者も多いし、外国旅行熱も盛んになってる。」

「やれやれ、今までの中で初めて元気の出る話を伺いました。」

汽車はスイッチバックという坂登りのテクニックを処々で用いながら、山々の間を潜(くぐ)り抜けて、漸く勝沼の駅に辿り着いた。甲府盆地が見晴るがされた。

(二〇〇〇・二・六)